Opinion

スポーツ写真家の世界

竹内里摩子

ジャーナリズムには男も女も国籍もないと思う。大切なのは仕事の結果。みな、スポーツ写真家の仕事が好きで、生きがいを感じているのだ。

〝スポーツ写真家〟と聞けば一般には当然、男性と思われている。実際、スポーツの現場で女性写真家と出会う事は少ない。それでもオリンピック・イヤーの〝今の時期〟は通常に比べると少し増える。おそらく女子選手村の取材の利点を考えたもののようで、即席のカメラウーマンが動き出す。そしてオリンピック熱がさめた頃、現場は、いつもの顔ぶれに戻っていく。何とも残念な事だ。

ところで私がこの職について、十年が過ぎた。きっかけは、大学進学を考える時期に、勉強が大の苦手でどうにかならないものかと、それこそ無い頭をひねっている時、ふと子供の頃から一眼レフカメラをいじるのが好きだった事を思い出したのと、学生時代に陸上部に籍を置いていたのがドッキングして、ある日、突然スポーツ写真家の道を選んだのであった。両親には反対されると思っていたが、何と父の一言は「今の世の中、自分のやりたい事すらわからない人間が多い中に、とにかくやりたい事が見つかったのは、すばらしい事だ。やりたい事ができるのは、幸福な事だから頑張りなさい」だった。

まるめ込む作戦をたてていたが、結局は未遂に終わってしまい少々気がぬけたのを思いだす。

しかし、その後に聞いた話では、「どうせ三日坊主だから、とりあえずやらせれば、本人もあきらめがつくだろう」という事だったらしいが、あいにくまだまだつづきそうである。

まず私がねらいをつけたのが、長年、日本体育協会の写真をうけおっている岸本健氏であった。岸本氏は「女の子は結婚するのが一番の幸せだ」といわれたが、その数時間後には神の恵みのごとく、一生懸命暗室の掃除をしていた。

ある時、新体操国際大会があるので取材に来ないかと恩師に声をかけられた。スポーツとは〝いかに速くそしていかに高く〟が基本で、得点競技は、スポーツなんかじゃない！　と思っていたが、すばらしいスポーツだった新体操。これは芸術だと思った一つに、単に速く高くではなく、フロアーに居る選手が放つオーラが私をとりこにした。そして、今でもそのオーラをどの様に表現していくかが、新体操から学んだスポーツ写真のとり方なのだ。

結局、岸本氏のもとで約三年お世話になった。

初めて海外取材に出掛けたのが十九歳の秋。新体操の世界選手権だった。その時に会った一人の女性写真家が居たからこそ、今の私があると思う。彼女の名は、アイリーン・ラングスレー。英国人で、国際体操連盟のオフィシャルフォトグラファーであり、夏・冬五輪はもとよりウィンブルドン等でも最先端で仕事をしているスポーツ写真家だ。彼女の写真には、温か味があふれている。私が大好きな、そして最も尊敬する彼女に励まされ、助けられたからこそ、十年間やってこられたと思っている。

そんな彼女を中心にＩＡＷＳＰ（国際女性スポーツ写真家協会）を発足した。そして女性スポーツ写真家の作品をあつめて、コダック社に協力を求めて一冊の紹介パンフレットを製作した。何故わざわざこんな事をしたのか。それは女性だから話題にしてもらいたいとかいったレベルの低い話では無く、わざわざ組織化して立ち向かわなければならないほど大きな壁がこの世界にはあるということを、多くの人に知ってもらうことにある。男性社会のこの世界、目には見えない問題が前途をふさぐ。おそらく今まで、心ならずもこの仕事をあきらめた女性スポーツ写真家も、同じ悩みで苦しんだ事だろう。

ジャーナリズムには男も女も国籍も無いと私は思う。大切なのは仕事の結果なのだから。私たちの組織のメンバーは、スポーツ写真家の仕事が好きで、重いカメラをかついで、ドロだらけになっても、そのスポーツシーンを切りとる事に生きがいを感じているのだ。それが今まで女性が少なかっただけなのだ。このメンバーの作品には、女性らしい温か味のある写真が数多くプールされている。これを、ぜひとも世界中の人たちに見てもらいたい。そのために今後、私たちは、事あるごとに、写真展や写真集などを通して、作品を発表していきたいと思っている。

「スポーツ」、それは国境を越えたすばらしい喜びなのだから……。

〈たけうちりまこ〉ＷＳＦジャパン会員、国際女性スポーツ写真家協会会員